



コマツナ新品種

「CM-1」の特性と栽培の要点

雪印種苗(株) 千葉研究農場

作物研究室 本多 範久

1 はじめに

コマツナは、古くから関東近郊の軟弱野菜として栽培されてきましたが、近年、カロチンやカルシウムを多く含む健康野菜であること、また、栽培が容易で連作にも比較的強いことから、各地で注目を浴びるようになりました。作付面積は年々増加傾向をたどり、収穫量も5万tを大きく超えるなど、全国的に周年栽培される品目に成長しました。しかし、高温期の栽培は、軟弱徒長ぎみになることや病虫害の影響から、出荷量がなかなか安定しないのが現状です。このため、生産者の夏播き品種に対する要望は強く、特に、葉色が濃く、株張りに優れた収量性のある品種が切望されています。当社では今後さらに需要拡大が期待されるコマツナの品種開発に取り組んでおり、今回当社としては初めてのコマツナ品種を発表するに至りました。

今春より販売を開始するコマツナ新品種『CM-1』(品種名:浜ちゃん)は、高温期の栽培でも草姿のバランスが良く、株張りに優れた多収タイプのコマツナです。しかも、収穫後半に生育がゆっくりとなるため、収穫期間が長く、夏どり栽培に最適な品種です。ここでは、本品種の特性並びに栽培の要点について、また、併せて高温期の安定生産に向けてのポイントについてご紹介致します。

2 新品種『CM-1』の特性

(表1, 写真1~3)

1) 高温期の栽培でも生育はじっくり

~ 夏期の雨よけ栽培に最適! ~

徒長しやすい高温期の栽培でも、生育がゆるやかで収穫適期の幅が広く、在圃性に優れます。特に、収穫時期になると生育が緩慢になるため、他品種と比較して2日間位余裕が出来ます。広葉、

大葉で葉肉が厚く、葉数が多いので収量が上がります。また、高温時の節間伸長や胚軸の徒長が少なく倒伏に強いので、株がまっすぐな良品が得られます。

2) 収穫・調整・結束作業が容易 草姿

コマツナは作業性を重視する野菜ですが、CM-1は極立性で収穫時の葉のからまりがなく、葉柄はやや太めで折れにくいので収穫がスムーズに行えます。また、葉先が垂れにくく、捨て葉が開張性で欠き取りが容

表1 コマツナ品種比較試験(露地栽培)

雪印種苗(株) 千葉研究農場

品種名	調査日 (月/日)	草姿 (9~1)	葉形	葉色 (9~1)	葉面 (9~1)	株張り (9~1)	葉柄の 太さ		葉長 (cm)	葉幅 (cm)	葉数 (枚)	一株重 (g)
							(9~1)	(9~1)				
平成11年4月2日播種												
CM-1	4/28	7.0		7.0	7.0	7.0	6.0	28.6	10.0	8.8	54.3	
他社H	4/30	7.0		7.0	6.5	6.0	5.5	27.8	9.7	8.0	46.3	
他社N	4/28	7.0		6.0	6.0	7.0	6.0	32.2	11.3	6.7	47.0	
平成11年7月2日播種												
CM-1	7/23	7.0		7.0	7.0	6.5	6.0	24.2	8.2	5.8	10.2	
他社H	7/24	7.0		7.0	6.5	5.5	5.5	23.5	6.3	5.4	6.6	
他社N	7/23	7.0		6.0	6.0	6.0	6.0	25.5	7.6	5.2	9.5	
平成12年9月21日播種: 露地												
CM-1	10/16	7.0		7.0	7.0	7.0	6.0	27.0	8.9	5.6	22.5	
他社H	10/18	7.0		7.0	6.5	6.0	5.5	26.6	8.3	5.4	20.5	
他社N	10/16	7.0		6.0	6.0	7.0	6.0	29.6	9.0	5.4	20.5	

評点基準 草姿: 9 (立性) ~ 1 (開張性) 葉形: 丸葉 、袴葉 葉色: 9 (濃緑色) ~ 1 (淡緑色)
葉面: 9 (滑面) ~ 1 (縮面) 株張り: 9 (大) ~ 1 (小) 葉柄の太さ: 9 (太) ~ 1 (細)



写真1 CM-1 ハウス栽培
株張り良く、荷姿がきれい

易なため調整・結束の能率があがります。

葉形・葉面

袴のない丸葉種です。平滑葉で葉縁の巻き(カブリング)がないため手にかからず、葉の破れがありません。

根張り

根付きの束出しの場合、ヒゲ根の多い品種では泥が落ちにくく、ヒゲ根をむしり取ってから水洗にかけますが、本種はヒゲ根が少ないので泥落ちが良く作業性に優れます。

3) 荷姿がきれい!

葉は極めて濃緑で照りがあり、高温条件でも葉面に縮みがなく外観が良好です。葉色は葉身のみならず、葉柄・株元まで濃緑で商品性が高く、夏場でも色褪せしにくい品種です。

葉数が多く、茎葉のしまりが良いため結束した時に腰部がくびれず、葉先がそろうので荷姿がきれいです。また、葉肉が厚く、日持ち性が抜群で、根切りのF Gフィルム詰出荷にも適しています。

4) 耐暑・耐病性で栽培が容易

耐暑性が強く、高温乾燥期でも新葉にアントシアンの発生がありません。高温による葉面の縮みや葉縁の巻きがなく、肉厚でしおれにくいいため品質良好です。

耐病性は多湿条件で発生する‘べと病’、‘白さび病’に強いので露地播きで安心して栽培できます。また、極立性で倒伏に強く、薬液が葉の裏ま

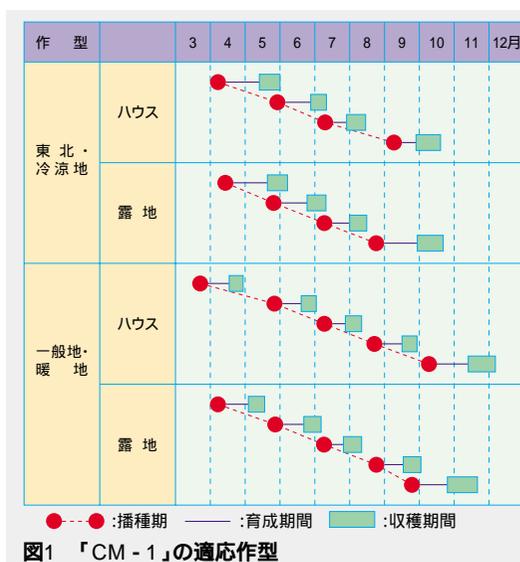


図1 「CM-1」の適応作型

で無駄なくかかるため、虫害防除が比較的しやすい品種です。

3 適応地域および作型

(図1)

1) 一般地・暖地

最適播種期：4月上旬～9月下旬：露地
3月下旬～10月上旬：ハウス

2) 東北、冷涼地

最適播種期：4月中旬～8月下旬：露地
4月上旬～9月上旬：ハウス

4 栽培上の注意点

1) 夏播き栽培

ハウスの栽植密度は条間15～20cm、株間3～5cmを基本とします。極端な厚播きでは徒長や節間伸長しやすくなるので、適正な播種密度になるよう播種機を調整してください。

高温期の肥料のやりすぎは、葉身と葉柄のバランスをくずすので注意が必要です。露地栽培の標準施肥量は10a当たり成分量で窒素15kg、リン酸15～20kg、カリ15kgが目安ですが、ハウスや高温期の栽培ではそれぞれを8～10kg程度に減量します。

CM-1は萎黄病には比較的強い方ですが、激発地および気象条件によっては発病が見られるので、圃場選定に留意して下さい。



写真2 5月播き ハウス栽培
極立性で収穫作業が容易

高温期になるほどコナガやキスジノミハムシの食害が目立ってきます。露地栽培では播種直後から防虫ネット、寒冷紗のべたがけやトンネル被覆を行い、成虫の飛来を防ぎます。防虫ネットは、うね幅より少し大きめに被覆し、葉が内側からネットにさわらないようにすること、収穫4～5日前には葉の着色および株を少し硬化させるため、ネットを取り除くことが良品生産につながります。

2) 春・秋播き栽培

露地の3月下旬播き、10月上旬播きはトンネル栽培を基本とします(一般地標準)。低温期の栽培では生育が極めて遅くなり、株が張りすぎたり、葉柄と葉身のバランスが崩れやすくなります。本種の特性を生かすには春から秋までの温暖な時期に栽培してください。

春のハウス栽培では生育初期に換気不足で軟弱に育てると、胚軸が少し伸びることがあるので注意が必要です。

5 高温期のコマツナ栽培の要点

コマツナは土作り

もっとも手間のかかる収穫・調整作業を少しでもやりやすくするために、一斉に発芽させ、生育をそろえることが栽培のポイントとなります。そのためには、適度な保水性と排水性、通気性を備えた圃場づくりが求められます。コマツナは土壌



写真3 5月播き 露地栽培 極濃緑、滑面で品質良好
(CM-1:ラベル手前)

適応性が広いので土づくりを忘れがちですが、完熟堆肥などの有機質を年間2～5t施用し物理性の向上を図ることが大切です。また、コマツナは酸性に強い野菜ですが、pH5.0以下であれば石灰質肥料を施し、pHを5.5～6.5に保つほか、施設の塩類集積を招かないようにEC(土壌電気伝導度)にも注意を払い、残存している肥料分を考慮した施肥を行います。

播種と水管理

栽培期間が短いだけに、発芽が不斉になると収量や収穫作業効率を著しく低下させてしまいます。施肥、整地、播種、覆土、灌水などの一連の作業は、できるだけ均一に行うことを心掛けます。また、耕うん機等で耕うん、砕土する場合、土壤にある程度の水分がないと土壤が粉状化し、物理性を損なうことになるので注意が必要です。

播種量は10a当たり約1ℓが基準となりますが、栽培時期によって調整が必要です。作型と出荷先の要望する規格に応じて播種量を決定します。

灌水は、発芽をそろえるために播種直後に十分に行い、生育期間中は軟弱徒長を抑えるため控えます。生育中に散水する場合、灌水チューブは穴が細かく霧状に噴出するものを用います。水滴が大きいと泥はねし、また、株が倒れやすくなるため品質や作業効率が低下します。

病害虫防除

高温期の栽培では、コナガ、キスジノミハムシの食害を受けやすく、被害に合うと商品価値が低下します。現在、登録のある農薬は、B T剤の数種とアグロスリン乳剤ぐらいしかないので、土中に潜む害虫は土壌消毒で、飛来する害虫は防虫ネット・寒冷紗などの物理的防除で予防することが基本となります。

防虫ネットを使用する場合、1.0mm目合いでは、キスジノミハムシが通過するため、ネットの目合いが0.8mm以下のものを使用します。ただし、0.6mm目合いのネットについては、圃場の幅が非常に長い場合、うねが長くなるとうねの中央部の通気性が悪くなり、コマツナの生育が悪くなることがあるので使用を控えます。

病害にはべと病、白さび病、炭そ病、萎黄病等が知られていますが、登録のある薬剤は白さび病、炭そ病に対するユーパレン水和剤程度しかなく、土壌消毒や収穫残渣の圃場外への持ち出し、耐病性品種の利用といった予防策が防除の基本となります。

コマツナは夏期の栽培では生育期間が20日程度と短く、農薬時期等によっては農薬残留の恐れもありますので、農薬の散布には十分注意が必要です。散布にあたっては、低濃度で薬液量を増やし、葉裏まで十分農薬がかかるようにすることが効果的です。

収穫・調整のポイント

一般的には、草丈が25cm程度になるころに収穫します。収穫作業は、圃場で株を抜き取りながら、

子葉と第1、第2本葉を取り除いて結束します。高温期は収穫後鮮度が落ちやすいので、日中収穫を避け、できるだけ早朝に行います。また、葉が濡れているうちの収穫は、傷みが出やすいので露が切れてから行います。

根切り出荷の場合、調整は出来るだけ温度の低いところで行い、下葉を取り、株元の汚れを拭き取ってから袋詰めします。特に高温時は収穫してすぐに袋詰めをしてしまうと、熱が逃げずにコマツナが傷んでしまうので注意が必要です。最近では、鮮度保持のため予冷庫を利用するところが増えてきていますが、外気温との差が大きすぎると、かえって荷傷みをおこすこともあるので温度設定に気を付けます。

6 むすび

コマツナは周年出荷されていますが、高温期や低温期など時期によって草姿、収量性が異なるため、有利なコマツナ経営をしていく上で、その時期に適した品種を選択していくことが極めて重要です。今回、ご紹介した『CM-1』は高温期の栽培で能力を発揮する夏どり専用コマツナです。本種の特性を生かし、また、栽培のポイントを良く理解して頂いて、良品を安定出荷されることを期待しております。



ネコブセンチュウ抑制緑肥の定番

グリーンソルゴー

栽培するだけでネコブセンチュウ密度が抑制される。
粗大有機物生産量が極めて多い(40~50日栽培で5~8t/10a)。
窒素、カリの吸肥力が強く、塩類集積を軽減できる。
クルミネグサレセンチュウ抑制効果も認められ、イチゴの前作に最適。
播種期：高冷地 / 6月上旬~7月下旬
一般地 / 5月下旬~8月上旬
暖地 / 5月上旬~8月下旬
播種量：4~5kg/10a
すき込み時期：草丈1.5~2.0m(播種後40~50日位)